

死にゆく患者（ひと）と、どう話すか

明智龍男 監修/國頭英夫 著

＜書評者＞ 佐藤 恵子

（京都大学医学部附属病院臨床研究総合センターEBM推進部特任准教授）

本書は、筆者の國頭先生が「死に臨んだ患者さんにどう対応したらよいか」について、看護大学の一年生、つまり、ついこの前まで高校生だった人達と問答したり対話したりした様子をまとめたものである。死にゆく患者さんと話をするのは、がん領域の医療者であっても、しんどいことである。私も昔、乳がんで骨転移のある患者さんに「良くならないのだったら、いつそのこと早く死にたい」と言われて往生した。医療者がへどもどする姿がみつともないのは自明であり、なるべく避けているのが無難でもある。「この病院ではできることがなくなりましたので、転院をお勧めします」という常套句は患者さんが言われたくないセリフの1つであるが、医療側にとっては救いの抜け道であるが故に、今日もどこかで「がん難民」が生まれているのだろう。

しかし、「それをやっちゃあ、おしめえよ」と國頭先生は言う。「どうせ治らないから」といって患者を見放すことは許されない。死んでいく患者といかに向き合い、少しでもベターな“ライフ”を過ごしてもらえるか、というのは我々の使命である」と序盤から活を入れる（「はじめに」より）。理由も単純明快で、患者さんは死を迎えるその日まで生き続けるわけだし、果てしない孤独と山のような不安を抱えながら歩くのはつらからう、だからそれを理解している人が三途の川の手前までついて行かなきゃいけないのは道理でも

あり、人情でもある。それに、心を穏やかに保てさえすれば限られた時間を豊かに過ごすことができるだろう。おお、シャクにさわるくらいかっこいいではないか。実際は、かわいい学生たちに囲まれて、やに下がっているひひジイにしか見えないのだけれど。それはともかく、問題はどのようにして実現するかだ。出される課題は、先生が監修されたTVドラマ『白い巨塔』（平成版）などに登場する、「恩知らずで、気紛れで、偽善者で、尊大で、臆病で、自分勝手に、欲張りで、厚かましくて、けちで助平で馬鹿」な（p.248）患者や家族と医療者が織りなす、リアルでややこしい事例である。さあ、みんなどうする？

正解のない難題を次から次へとふっかけられて、学生たちもさぞかし困ったに違いない……と思いきや、彼らは医療者として何を大事にすべきかについて、命とはなんぞやという深いところまで降りて行って考え、自分の言葉で語っている。医療現場に出たこともなく、問題には必ず正解が1つあってそれを探して答えればよいという受験勉強に慣れきっているはずなのに、しかし、そういう彼らだからこそ生き死にの問題を自分の頭で考えることが新鮮で、血がたぎるような刺激的な経験になったことは想像に難くない。彼らにとってそれが快だったか不快だったかはわからないが、彼らが出ていく先の医療現場もまた例外なく、「恩知らずで、気紛れで（中略）馬

鹿な」人間が運営しているが故に、“患者の呼吸器を止めてよいという同意書に家族の署名をもらう”“技術がある限り延命治療を続ける”という行動原理が日常である可能性は大だ。その状況で“褒められはしないけれど不満や怒りも呼ばず、まあまあ納得してもらえ”道筋を立てるには、心のよりどころをたよりに自分のアタマで考え抜く力、ダークサイドをさらけ出して他者と対話する技能、矛盾を抱える不快さに耐えるしなやかさ、そして自分をも客観視してきちんとパフォーマンスできる胆力が必要であり、これを各人の自家菜園中に持たせることがひひジイの深慮遠謀なのである。特に医療機関のようにヒエラルキーが支配する場所では、このようなしたたかで可憐な人の存在そのものが、患者さんも医療者自身も守り、息苦しい現場を心地よい風が通り抜ける快適な空間に変える鍵になるだろう。

教職が本務ではない國頭先生にここまでやられてシャクにさわることこの上ないが、本書は、日々の臨床で“この治療は患者の利益になっているのかな”という疑問が脳裏をよぎりまくっている人や、終末期医療にかかわる人、医療者の教育を担当する人全てにお勧めしたい。國頭先生の語り口を知る人はニタニタしながら、そうでない人も見学者として講義室に座っているような臨場感を味わいながら、「人を診る、人を育てる、人を慈しむ」意味を噛みしめられること請け合いである。

● A5 頁 306 2016 年 10 月

定価：本体 2,100 円＋税

[ISBN978-4-260-02857-8]

医学書院